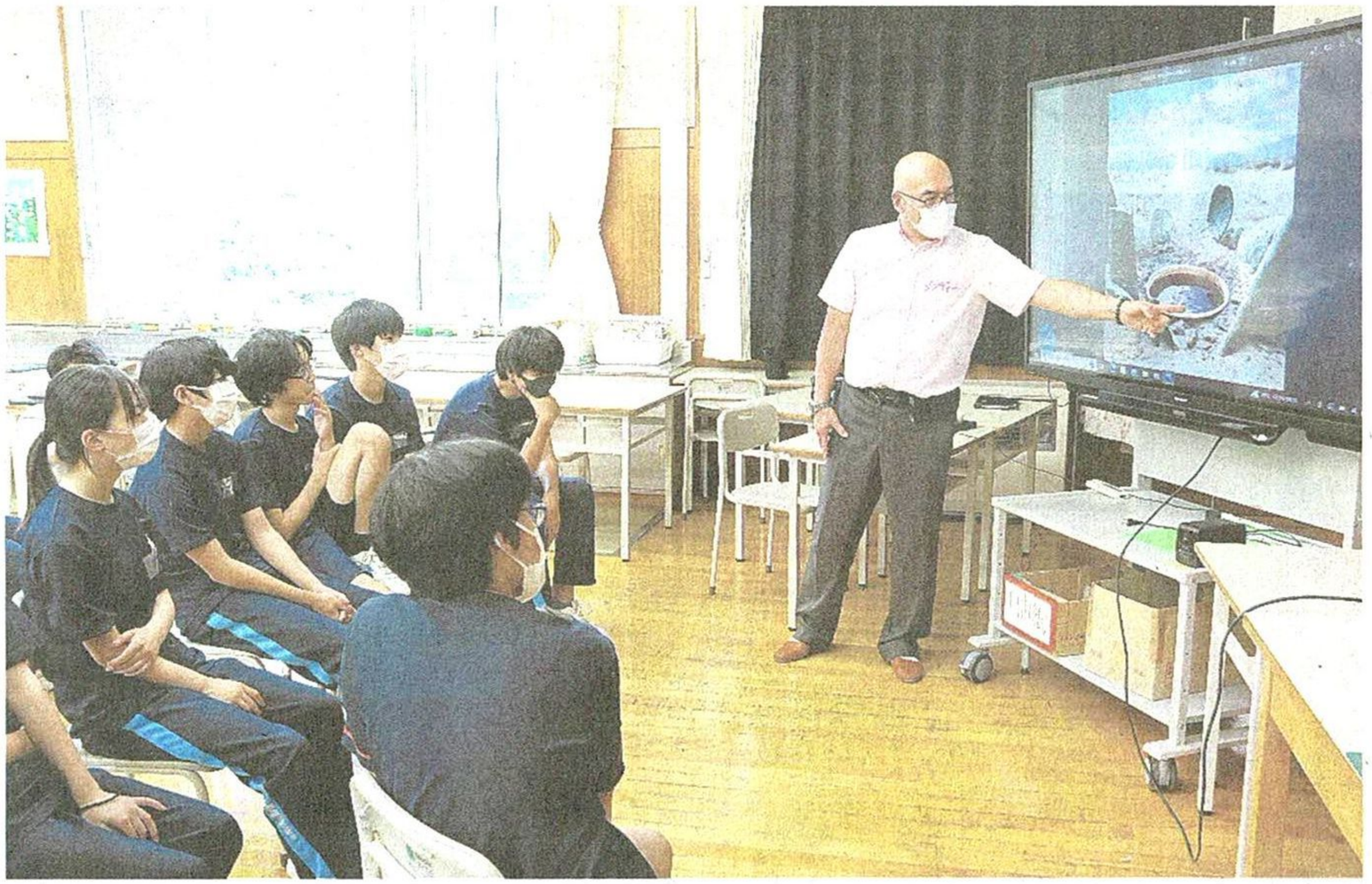
許諾番号 shin2023-koumi02

社会派アート 広がる思考

小海町小海中学校で13日、町高原美術館の名取淳一館長(58)らによるアート（芸術）の手法を活用した授業が行われた。2年2組の美術の時間、16人の生徒が同美術館で展示されている社会派作家の写真や映像作品を鑑賞しながら、作品の意味などを語り合った。



写真を見ながら感想を話し合う生徒たち

小海中で地元美術館長らが授業

国境って何だ？ 作品鑑賞し意見交換

授業は、県と県教委が進める「アート(芸術)の手法を活用した学び」推進事業の一環。同事業のプログラムのうち「対話を通した鑑賞」を県・県教委が実施するのは初めてで、作品の鑑賞と意見交換を通じて生徒の表現力を磨き自己肯定感の向上を図る。対話型鑑賞の授業は屋代中学校（千曲市）でも行う。

この日は、名取さんと同美術館学芸員の中嶋実さん(57)が授業の進行役。中嶋さんは、メキシコと米国との国境にある柵の写真を画面に映し出し、「国境について考えよう」と問いかけた。

生徒からは「ロシアとウクライナの問題もイメージする」との声が出た。中嶋さんは「なぜメキシコの人はアメリカに来たがるのか？」と続けて問い、生徒は互いに議論。「メキシコの治安が悪いから」、「アメリカに仕事があるから」といった意見が出た。他に、性差や環境問題についても写真を通じて考えた。

大井真実さん(13)は「周りの人の意見を聞くことができたのは良かった」。担任の赤羽雄大教諭(35)は「社会問題とアートを結び付ける思考が生徒たちに広がった。他のクラスの授業でも導入したい」と話した。